

ワ
ラ
ウ
カ
ド
ニ
ハ
フ
ク
キ
タ
ル

プロローグ

老人が、路上に倒れていた。

どうやら、見知らぬじいさんだ。じいさんの服は薄汚れていて肌も黒ずんでいる。元が何色だったのかわからないようなコートは油ででかてかで、何より彼からは路上生活者特有の酸っぱい臭いが漂った。

あたしは道をふさぐように倒れているじいさんを見て、別の道から行こうかな、と思った。少々遠回りになるが、20分・30分というほどではない。目指すコンビニは別ルートからも行ける。それを思いとどまったのは

(さつき、このじいさん、いたっけな?)

という疑問が頭をもたげたからである。

じいさんが倒れていた地点はあたしの1LKのアパートから徒歩1分。アパートの鉄製の階段を下りるその中途からこの道は見渡せる。階段を下りるとき、ここにじいさんがいることに気がつけばあたしはきつとこの道を通らなかつた。南ではなく北に進む道を選び、そこを左折し左折し左折して、本来目指すルートについたことだろう。

(いたのかもしれないな。)

あたしはこの数日、感情の浮き沈みが激しかった。だから階段を下りるときに周囲を見る余裕もなかった。今夜が新月であることに「空すらもあたしの味方ではないのね」なんて、自己陶醉していたくらいだ。

このままじいさんを見殺しして通りすぎるのも、引き返すのも、ひどく不自然だと思った。別に誰かがあたしを監視しているわけではないが、どこの誰とも知れない「何か」に後ろめたさを感じて、あたしはちよつと腰をかがめた。

「あとう」

じいさんは反応しない。

もうちよつと大きな声で話しかけてみた。

「あとう、大丈夫ですか」

じいさんは反応しない。死んでいるのかもしれない。そう思ったら怖くなった。あたしが浮浪者の死体の第一発見者となるのか？ そうしたら警察に尋問されるんだろうか。そもそも、死体というものをもう長いこと見ていない。祖父が亡くなったのは物心つく前だったし、実家の愛犬ヨシローが他界したのはあたしがこっちで生活を始めた頃だった。だから、これが死体だとしても、死体を知らないあたしにはそれと判別できない。

(119)

咄嗟にコートのポケットに手をつつこんだ。が、携帯電話は部屋に置いてきたのだ
と思い出す。ポケットには大型スーパードで3000円で買った財布しか入っていない。
誰かを呼ぶ？或いは逃げ出す？でも、仮にこれが死体だとして、この場を逃げ出す現
場を、誰かが見ていたら？あたしは全く無実であるのに殺人犯にされてしまわないだ
ろうか。

——もう一度、きちんと、確かめよう。それで、死んでいたら、部屋に戻って、1
19——いや、警察を呼べばいいのかな。死んでるかどうかなんて、どうやったらわ
かるんだろう。テレビだと胸に耳を当ててるけど、うつ伏せだし…

悩んだ挙句、しゃがんで、背中を叩いてみた。

「もしもし、おじいさん」

反応はない。触れた背中中は冷え切っている。でも真冬の真夜中なのだから、普通に
していても身体は冷える。冷たくても当たり前かもしれない。それとも、死体の持つ
冷たさってこんなもんならだろうか。大体、死体は冷たいんだろうか。

今度は肩を叩いてみる。

「おじいさん」

と、目の前に突如赤黒いニヤケ顔が現れた。

あたしは悲鳴も出せず腰を抜かした。

さっきまで潰れるようにうつ伏せていたじいさんが、突然起き上がったのだった。

「ありがとなあ」

ところどころ歯の抜けた口を大きく開いて、てかてか口元まで垂れた鼻水を右の人差し指でこすり、眉毛は真っ白のぼさぼさで、髪の毛は白ばかりのところどころ黒があつてそのくせ貧弱な畑のようで、そんな顔を目の前に突き出して言うものだからあたしはつい目を背けた。

「ありがとなあ、嬢ちゃん」

あたしは目をそらしたまんま「いえ」と言うのが精一杯だ。立ち上がったら逃げるんだ。いち、にの、さん：で、じいさんがあたしの手をつかんだ。

咄嗟に頭に浮かんだのは、夕方のニュースで被害者女性という匿名性で紹介される自分だ。でもそれって親告罪では？自分で言わなくちゃいけないの？匿名性ある被害者じゃなくて実名報道される被害者になる可能性は？そうになったらお父さんは？お母さんは？弟は？あいつはなんて思う？あいつは私をかわいそうに思う？

とりあえず、どれもいやだ。

悲鳴をあげようとしたけれど、声はやたらかすれて空気しか喉から出てこない。腰も抜けたまんま立ち上がれない。じいさんは、よぼよぼのくせにとても力が強かった。点滅してばかりの街灯に怒りを感じた。なんで私ばかりこんな目にあうんだろう！力を込めて立ち上がる。その拍子に、ポケットから財布が落ちた。

「あつ」

拾おうともう一度腰をかがめたそのとき、突然どこからか灰色の汚い犬が現れて、財布をくわえて走り去ってしまった。一度だけ、バカにするような目でこちらを振り返り立ち止まったが、角を右に曲がって姿を消した。

あたしはじいさんのがさがさの腕を強く振り払う。

「あたしの！財布！」

大きな声がするつと出た。で、走って追っかける。もう夕方のニュースなどどうでもよかった。今のあたしのトップニュースは特価3000円の財布の行方だ。全力で角まで走ったが、犬の姿はもう見当たらなかった。角を右折するとすぐに道は北と西と南の三方向に分かれているので、どちらに行ったかわからなければ動きようがない。あたしは文字通り立ち尽くした。

と、ひよい、と背後から例のじいさんが顔を出し、「この世の不幸を全部背負ったよ

うな顔してるなあ」と、にやにや笑いながら言った。背中あたりから首を通っておでこのほうまで、すうっと感情の流れが立ち上った。これが「頭にくる」ということか。

「来月の給料日まであの財布が全てなんです」

自分でもびつくりするくらい嫌味のある言い方をしたが、気にすることでもないだろう。当人も全く気にしていない様子でまた、ところどころ歯の欠けた口をだらしく開けてにやにや笑った。

「そんな顔して、戻るわけでもないしよお」

その表情が腹立たしいのは、嫌味や悪意を込めた笑顔ではなかったからだ。その顔は、まるで「地顔が笑い顔なのです」とでも言うように、目尻が下がり、口角が上向きになっており、ぼさぼさの眉も下向きになっていた。悪意は込めていないが善意もない、という顔だ。気に食わなかった。

「笑えばいいんだよお、笑えば」

そう言うじいさんに「ああ、そうですね」と投げやりに言い放つと、あたしはとりあえず角を曲がって西向きに、つまりは真っ直ぐに走ってみることにした。じいさんの目の届かない範囲に行きたかったのだ。

しばらく探し回ったが、犬の姿は見当たらなかった。その頃にはちらほらと、家々から防寒着に身を包み、バッグを片手に出てくる人々が見えた。中には振袖の女性もいる。彼らはみんな西に向かっていた。お寺に向かっているのだろう。あたしは、息を切らしているのが恥ずかしくなつて、すぐすぐと歩いて元来た道に戻ることにした。

（犬は、ずっと財布をくわえることが出来るだろうか。）

その疑問が心に湧いた。ほとんどの犬はいつも口を開けて舌を出している。発汗が出来ないからそうするのだと何かの本で読んだ。実家で昔飼っていたヨシローという雑種犬を思い出す。ヨシローは柴犬系の雑種で、茶がかつた白のような色をしていた。ヨシローは頭が悪くてお手もお座りも覚えなかったが、愛想はすこぶる良くて、いつも舌を出しては涎を垂らし、あたしが学校から帰ると制服が涎でべとべとになるまで舐めまわした。晩年はよく動けなかったせい、おしっこを漏らしながら歓迎してくれた。年末年始に実家に帰らなくなったのはヨシローが死んでしまったせいでもあったのだ。

（犬は、ずっと財布をくわえていることは、出来ないだろう。）

ヨシローのことを考えて、その結論を導き出した。犬にそんな集中力があるとは思えないし、そこまで財布に固執する理由もないだろう。きっとどこかで落としている。あたしは足元に注意しながら歩くことにした。

さつきいさんと別れた角の手前まで来たが、あたしはそこから先に進むことをやめた。犬はたしかに角を曲がるまでは財布をくわえていた。だから、こっちはあるまい。何より、まだあのじいさんがいたら嫌だ。あのじいさんはもしかして、ああやって誰かの同情をひいて犯罪をするのが目的だったのかもしれない。一人で歩くのはよく言うように怖いことだ。それに、寂しい。

あたしは南に進んだ。踏み切りに出る。23時を過ぎているから電車も少ないだろうと思ったが、踏み切りはカンカンと高い音を立てて遮断機を下ろす。赤い点滅信号が瞬いて遠くからゴーツと音が聞こえた。時計も部屋に置いてきたので正確にはわからないけど、きつと1つ向こうの西戸鳴駅に23時25分に着く準急だろう。あたしのホームグラウンドである荒谷駅は鈍行しか止まらないのだ。急げば財布が見つかるわけでもなかったし、あたしにはすぐ諦めの波がやってきた。諦めたかと思えば焦燥感がやってきて「せめて今夜中に見つけなければ」と思ったりもするのだけれど、すぐに「見つからないんじゃないかなあ」と思う。警察に行こう、と思い立っても「簡

単に見つかったら恥ずかしいし、犬に盗まれたなんて信じてもらえないかもしれない」という考えがよぎり「せめて12時になるまでは自力で探そう」と考え直す。そうかと思うと、脈絡もなく十日前のことが思い出されて涙がこみあげてきたり、人間って一度にいろんなことを考えられるもんなんだなあ、と妙に感心する。

果たして電車は行過ぎた。

ふと、線路脇を見ると彼岸花が一輪咲いていたので目を奪われた。季節はずれだ。そのとき一陣の風が吹いて、コートに覆われているはずの背筋まで冷気が入り込んだ。身震いをひとつ、遮断機が上がるとともに歩き出した。

踏み切りを渡る間もあたしは注意を下の方に向けた。出来るだけ広範囲を見るようにつとめながら歩いたが、見落としがあるのではないかという不安や「こちらではないのかもしれない」という心配もあった。

あまりに下ばかり見ていた。あたしは誰かとぶつかってしまった。

「すみません」

脊髄反射のように言葉が出たが、相手も脊髄反射のように「ごめんなさい」と言った。その声は比較的高く、あたしよりも20センチばかり低い位置から聞こえてきたので、ちよつとだけ顔を上げて見た。子どもだ。

「あの、お姉さん」

目が隠れてしまいそうなほど前髪が伸びた少年は、少し後に下がってあたしと一定の距離を持つと話しかけた。通り過ぎようとしていたあたしは「はい」と愛想よく答えた。イライラしても悩んでいても、知らない人に愛想よくすることは出来るものだ。

「ここらで、ちよつと変わった人を見ませんでしたか？」

「変わった人？」

「そう、ちよつと変わった——いえ、外見は普通の人かもしれませんが。しかし、どことなく普通ではない雰囲気——なんといいばいいのかな」

外見は普通だけど普通じゃない雰囲気の人、と言われても、あたしは今日の前にいる少年しか思い当たらなかつた。小学5年生くらいだろうか少年は、青ツパナをたらしめていたり、意味のない英語が書かれたジャンパーを着ていたり、おしゃれだという今時の子どもにしては少々かつこ悪いが、普通といえば普通の外見だった。しかし、突然話しかけるところとか、その口調が大人びているところとか、とにもかくにも全体的に、普通ではない雰囲気があった。

でも、彼が問うているのは、間違いなく彼以外の人物のことだろう。

「特に見てませんけど」

あたしが答えると、少年はこれみよがしにため息をつく。

「そうですか」

それから「このあたりのような気がするのですが：それでは、誰か見慣れない人物を見ませんでしたか？」と、またも通り過ぎようとするあたしを引き止めた。引き止められるとろくなことはないというのに、あたしは素直に引き止められた。まったく、本当にこのときに無視すればよかったのだ。

「見慣れない人といっても：このへんの人を網羅しているわけでもないですから。ホームレスの人を見かけたくらいです」

「ホームレス、ですか。うん、なるほど！ありがとうございます」

少年は目に輝きを加えて爽やかな笑顔を作った。前歯にニラらしきものが挟まっていたが、小学生だし気にしないことにする。あたしは、いえいえ、と小さく言うと、そのまま行き過ぎようとした。しかしまたも少年はあたしに話しかけた。あたし以外にそこには人の姿がなかったので、それは絶対にあたしに話しかけていたのだ。内容はともかくとして。

「ありがとうございます、お姉さん。お礼に除霊してあげますよ」

ポーン、と、音がした。踏み切りを渡った路地は小さな商店街になっている。音はその一角の「カメラ屋ツノダ」から聞こえてきたのだった。20時30分を告げる鐘だろう。

「ジョレイって何ですか」

と、言いながら、頭の半分で「なぜあたしはさつきからこの年下の少年に対して敬語を使っているのだろう」と考える。

「お気づきじゃなかったですか？」

彼の敬語というよりビジネスマンが用いるような儀礼的丁寧語に感じられ、いわゆる慇懃無礼というか、嫌味すら感じる。

「何のことでしょう」

ここでようやくあたしは苛立ちを自覚した。そう、あたしは急いでののだ。次の給料日までの半月を無事に過ごすために早急に財布を見つける必要があった。しかし少年は、またもあたしを引き止めるかのようにコートの裾を引っ張ると距離を縮めて、声を潜めた。

「お姉さん、幽霊に取り憑かれてるんですよ」

「何が？」

とんちんかんな受け答えをしてしまった。もう一度言葉を頭の中で繰り返す。「おねえさん、ゆうれいにとりつかれてますよ」おねえさん、ゆうれいにとりつかれてますよ。

「初耳です」

続けざまにあたしはとんちんかんなことを言った。少年はクツと喉を鳴らした。笑われたのだ。

「そうですか。てつきり気づいているかと」

「冗談でしょう？」

特に疑う気持ちを自覚していたわけでもないが、社交辞令のように、或いは「この問いにはこの解が最も正答に近い」という現代国語の問題集の解説のように、あたしはその言葉を放った。少年は、また、これみよがしに悲しい顔を作って見せて、「信じてもらえないのですね」と言うのと深呼吸をした。そのままあたしのコートの裾を引っ張っていた右手を、あたしの左手に移動させて、そこにさらに自分の左手を重ねた。

「冥府の風に流されたる靈魂よ、その姿をここに現さん」

ぶつくさと彼が呟くと、身体に血液が逆流するかのような感覚が走った。それは、

心臓をしめつけられるような、血の気が引いていくような。頭がぼかぼかとして足元がとても冷えた。そうかと思うとすぐ、氷水をぶっかけられたかのような衝撃が後頭部に生じ、頭から順に身体が冷えて、北極か南極に投げ出されたみたいに身体が凍りついた。だがそれもほんの一瞬のことで、すぐにぼかぼかと血液が順調に巡ったのを感じると、やがて、先ほどまでの小さな商店街の路上があたしの目の前に展開した。

安堵とともに背後に人の気配を感じて振り返った。

そこには、頭から血を流した肥満男性が腕組して立っていた。

「ちわ、高柳です」

「す、鈴木です」

習慣とは恐ろしいもので、目の前の男性が血を流していることよりも、幼い頃からすりこまれた「挨拶されたら挨拶しよう」というルールが優先された。少年はそばでけらけら笑って「お姉さん、その人は僕とお姉さんにしか見えてないんだから、話すときは注意してね」と言う。あたしの胸の内は少年に対する憤りだとか、あつ、そういえば財布……っていう気づきだとか、現状に対する不安だとかでごちゃ混ぜになっていたのだけれど、それにふさわしい言葉も思いつかなかつたし、あたしたちは初対面であるので失礼なことを言っただけとはいけない気がしたし、何より恐らくあたしは動転し

ていたので「はあ、そうですか」としか言えなかった。

「さつきその踏み切りを通ったときに、このデブを拾っちゃったね」

高柳氏は「初対面でデブは失礼だろう」と腕組したまま口をとがらせた。突き出された唇に頭から流れてくる血がのっかる。高柳氏が少年の言うとおりに幽霊であるという証拠はどこにもなかったが、輪郭がぼやけていることとか、分厚い体からうっすらと周りの景色が透けて見えることとか、幽霊ではないという証拠もどこにはなかった。「これで信じましたか？」

上目遣いで少年はこちらを見ると、あたしの回答を待たずに「で、除霊だけどね」と話を続けた。そのときのあたしは驚くばかりでそこを立ち去ろうという気が起きなかった。彼に裾をつかまれたそのときに、あたしは既に逃げることでできない運命だったのだ。

「もうちよつと広い場所が必要なんですよ。この路地は狭すぎるんです。お姉さんからデブを追い払うことは出来ても、別の物や、或いは人間に移動してしまうだけです」あたしは横目で後ろのデブをチラリと見たが、ニタニタ笑っているだけだ。その表情の意図が読めなくて若干気分が悪くなったが、若干であって、あたしの感情の大部分は困惑していた。

少年は前髪の下から覗く頬を、寒さ故か興奮故か、紅潮させて拳を握る。

「僕は完璧主義者なんです。除霊するならただ追い払うだけじゃなく、きちんと冥府に戻してやりたい。それが霊への思いやりだとも思うし、人間に対する思いやりでもあるし、世界の秩序を保つてことですよ」

世界の秩序とは、ずいぶん大きく出たものだ。

デブはクツクツと喉を鳴らして笑った。一体その半透明の身体はどこから声が発せられるのかシステムがわからないのだが、今はどうでもいいことだった。

「お姉さん、このあたりで、出来るだけ人が少なく、物も少ない、広い土地はありませんか。僕はある人物を追ってここに来ただけなので、このあたりには疎くて」

彼の言葉はいずれもわざとらしくて、その言葉がどれほどの真実かは測りかねたが、今この状況自体が測量しかねる状況であったので、あたしは素直に「それなら、あっちのほうにある公園が」と答えようとした。しかし背後のデブが「公園よりもう一つつけのところがあるぜ、俺の除霊にな」と、さえぎる。

少年とデブはしばし視線を交し合った。囲碁や将棋のような見合いである。お互いの腹を探ろうとしているのか、或いは両者ともただのカッコつけなのか。

より一層わざとらしい口調になった少年が視線を外した。

「了解。どこだいそれは」

デブはニヤリと口元をゆがめた。

「歩いてすぐだ」

踏み切りを渡って南に真っ直ぐ行けば大通り、荒谷駅から電車に乗って30分くらい西に行けば犬耆市に出て終点犬耆湾駅。また荒谷駅に戻って西から北に歩けば荒降田寺。線路沿いを東に行けば浮浪者アパートとも呼ばれる小さな公園、公園を南に向かえば文房具店と印刷屋を挟んで曾古野高校だ。特記するほど偏差値が高くも低くもないその公立高校の付近は、普段は制服を着崩した少年少女らが特に揉め事を起こすでもなくウロウロしている。

彼らは若さを満喫しているし、高校生であることに特権を得ていると思っているようだ。大通りのコンビニやファーストフード店、それにファミレスも、授業の終わる15時過ぎから部活の終わる20時くらいまで高校生に占拠されるし、それらの店舗の品揃えや内装は地元民よりも高校生を意識している。さきほど23時半を告げたカメラ屋も、店内に「体育祭の思い出作りは当店で」と、高校生向けのPOPを掲げていた。

もちろん実際は、高校生だけではなく商店街を構成している住民もいる。アパートを北東に自転車でしばらく行ったところには、一昨年まで週に3か4の頻度で通って

いた大学もあるのだから、大学生もいるはずだ。にも関わらず高校生が目立つのは、彼らが皆同じ服を着て、高校生でございと主張するファッションで身体をまとめているからかもしれない。彼らひとりひとは異なる人間なのに、皆同じ人間で、皆同じ人生を送っているように見える。

しかし、今、彼らの姿は見えない。仮に彼らのうちの誰かがここにいたとしてもそれが高校生だとは気がつかないだろう。学校にいる人間というのは制服によって存在を規定されている。制服を着ればおじいさんだって高校生に見えるし、制服を着ていなければ高校生は高校生に見えず、誰であるのかわからない。逆に言えば、高校にいる人間は皆、高校生に見られる可能性を持っているということであり、つまり、あたしたちが誰であるのかという点についてもわかる人間はいないということだ。

あたしたちは曾古野高校のグラウンドにいた。

「たしかに広いけど」

広くて障害物がないということは、風を直に受けるということだ。あたしはグラウンドの砂を巻き上げて拭く風に身体を震わせた。今夜は北風が強い。しかし、さきほど踏み切りを渡ったときに感じたように冷気が背中に入り込むことはなかった。

（そうか、あれが「踏み切りを通ったときに、このデブを拾っちゃった」のか…）

あのソラ寒さと少年の発言が一本の糸でつながり、合点がいった。合点がいった、ということは、あたしは高柳氏が幽霊であることを認めたとということになるが、このときはそんなこと意識していなかった。

ここまで歩く5分強の間、あたしたちはほとんど話さなかった。明らかになったのは少年の名前で、彼は「ヤシロ」と名乗った。それがファーストネームなのかファミリーネームなのかはわからない。気になったが、彼が「ヤシロです、よろしく」と言ったのだからそれ以上問うたりしなかった。知ってどうなるわけでもなかったし。

高柳氏は始終あたしとヤシロ少年を見てはニタニタしていた。これから除霊されようとしているのにだ。あたしは道中ずうっと、状況に流されてしまったことを後悔していた。――ヤシロくんは本当に高柳氏を追い払うほどの能力を持っているのだろうか。子どもは、「これは本当だ」と言っているうちにその嘘を信じてしまう節がある。もしかして霊なんてのは、子ども特有の「嘘」かもしれない。とはいえ、彼に手を握られた後、不意に半透明の高柳氏が見えるようになったのも、紛れも無い事実であるわけで…。

門をくぐるのは多少苦勞した。大通りに面した正門は人目について入りづらかった。目指すグラウンドは公園と向かいあった裏門側にあり、そこだけが住居に面していな

かった。ホームレスの人々の目線だけが気になったが、彼らは無気力そうにこちらを見るだけだった。

コートがちよつと邪魔だったけど、格子に足をかけて門を乗り越えた。ヤシロ少年が乗り越えるでもなく、門と門柱の隙間にその細い身体を入れたとき、エンジン音がした。ぎくりと首筋が凍る。冬休みだというのに、誰かがこんな時間まで仕事をしていたのだ。少年はするりと門から抜けると這うように常緑樹の下に隠れた。デブ柳氏が「安心しろ。東門から出て行った」と言うまで、あたしも一緒になって常緑樹の下に隠れていた。もしも何かが起きたら年上であるあたしの責任になるではないか。

先導を切ってグラウンドの中央に走り出したヤシロ少年は、あたしを「ここに立つて」と指定した位置に立たせると、拾った小石で足元に絵を描き始めた。まず簡単に五角の星型をつくり、それを円で囲んだ。円に細かく格子を描いていたが、その間もやはりあたしたちは無言だった。あたしが一度「あの、これどうすれば」と声を出したら「しっ、静かに。失敗したくないでしょう」と叱られた。子どもに叱られた。なので黙っていることにした。

何が起きるかわからないのを黙って待つ時間というのは非常に長い。実際よりも長

く感じる。推測するに5分もかからなかったのだが、あたしには10分にも30分にも思えた。その間に脳裏をよぎるものは、やはり、この短い時間でよくもこれだけ考えられたものだなあ、と後からすれば感心するほどの量なのだ。

まず、財布のことを考えた。それから、死んじゃうのかなって思った。すぐに、数十分前に出会ったじいさんの顔が思い浮かんだ。そのまま引き戻されるように意識はアパートに行き、十日前、タツヤが自転車を引いて出て行ったところを思い出した。これまでも何度かあった別れの予感の中で、その行為は予感ではなく確信として迎えられたのだった。それから、違うことを考えようとして踏み切りを思い出した。あそこで高柳氏があたしに取り憑いたのだ。でもすぐに、タツヤのアパートは電車で一駅だったなあ、と思い出す。忘れてくて仕方がないことなのに。そうだ、財布だ。財布のことを考えよう。あたしは財布がどこに行ったのかと考えることにした。あたしの財布はボロボロの犬によって盗まれ、踏み切り手前の角から先、ずっと行方不明だ。一体どこへ行ったのか。そういえばヤシロくんは誰かを探しているようだったけど、誰を探しているのかな。高柳は何であたしに取り憑いたんだろう。あ、コンビニだ。あたし、コンビニに行きたかったんだ。どうしてこんなことになっちゃったんだろう…

0時まで家に戻ろうと思っていたのにな…

：それらを打ち消すように、ヤシロくんが「出来た！」と叫ぶ。何が描いてあるのかわからなかったが、とにかく完成したらしい。

高柳氏は相変わらずあたしの背後でニタニタ笑っている。それを見てヤシロくんは負けじと笑ってみたが、その作り笑いのわざとらしさが度合いを増しており、どうやら彼は分が悪いらしい。

「始めます」と、少年は、前髪の奥にある瞳をギラリとさせて、両手を組んだり、指をあれこれ動かしたりした。

「冥府に雨を呼びたまえ、風を呼びたまえ、雷を起こしたまえ、雲を切り裂く荒ぶる力で御魂を清めたまえ、我が天上の月光よ、闇の治世よ、彷徨える高柳ナニガシを冥府に戻したまえ、帰らせたまえ、さあ清めたまえ、祓いたまえ」

ヤシロ少年の身体が青白く発光し、その光は天に昇っていった。光は空を割くかのように季節はずれの雷鳴を呼んだ。高柳氏にはわかには眉をひそめたが、「そんなはずはないのだ」と呟いた。

「そんなはずはないのだ、今夜は新月なのだから」

果たして、雷鳴はすぐに止んだ。そして再び真っ黒な空が頭上に広がった。デブ柳は何事もなかったかのように平然としている。

これまたわざとらしく、しかしどうやら自然に、ヤシロくんは姿勢を崩して倒れた。

「くそう、いつもの力があれば！あの人に隙をつかれたんだ…」

どこまで本気かすっかりわからなかったが、あたしもゲンキンなもので、ファンタジ―漫画のヒロインよろしく「ヤシロくん！」なんて言って駆け寄ったのだ。この状況で行くならば高柳氏は間違いなく「悪者」だ。

高柳氏もその状況に酔っているらしく、「ふっふっふ」と鼻で笑った。後から思い出すと笑うしかないのだが、この時は三人が三人とも陶醉していたた。

しかしその陶醉はすぐに打ち砕かれた。

突然、夜空がピカリと光ったのだ。先刻の青白いそれと異なる、黄色く眩しい、懐中電灯みたいな色の光だった。

「ま、まさか、そんなばかな」と呟いたのは高柳氏。ヤシロくんもあたしもそんな呟きを発することすら出来ず、ぽかんと口を開けて、間抜けな顔をひっさげて見上げるのみだ。

まもなく、光は真っ直ぐに落下してきて、ドシン、とグラウンドを振動させた。隅

のサッカー用ゴールネットが揺れたので結構な衝撃だっただろう。

「あいたたた」

そう呻きながら、姿を現した衝撃の正体は、赤い衣装に身を包んだ中年女性。

そして、彼女が立ち上がったのとほぼ時を同じくして、荒振田寺の方角から風に運ばれて鐘の音が聞こえてきた。ひとつ。ふたつ。みつつ：あたしはこの鐘が108つまで続くのだと知っている。なぜなら今日は——あと数分で過去にされてしまう今日は——12月31日、大晦日。

鐘の音が響く中、女性は立ち上がり、背負っていた大きな白い布袋を拾った。空から降ってきたのは彼女とその袋だった。あたしは元々開けていた口をさらに大きくあぐり開けて、ヤシロくんはこれでもか、というほどに唇をぎゅっと縛り、さっきまでカッコつけてた高柳デブは、口をぱくぱくさせた。彼女は腰に手を回してマッサージするように撫でながら「あら、除夜の鐘。もう新年になっちゃうの。やだわ、年越し仕事なんかはしたくなかったんだけどね：でも何でこんなところに来ちゃったのかしら」と、呟いて、こちらを振り返った。

あたしは2つのことに驚いていた。空からおばさんが降ってきたっていうことがまずひとつ、そして、そのおばさんのふくよかな肉体を包んでいる赤い衣装が、どう見ても、サンタクロースーしかも、ミニスカートのーということが、ふたつ。

おばさんはポケットから茶色い携帯電話のようなものを取り出すと、彼女の身体にそぐわない小さな親指ですばやく操作した。茶色いそれはアンテナを2本持っており、さながらトナカイ。

トナカイをこちらに向けたおばさんは何かボタンを押した。トナカイの角がグリー

ンに点滅し、「聖者が町にやってくる」が電子音で流れる。

「ようやく見つけたわ」

ひとりごちて、彼女はヤシロくんにトナカイを見せた。

「ボク、クリスマスプレゼントはいつになったら受け取ってくれるの？」

目と口をぽかんと開けるヤシロ少年の上を、108の除夜の鐘のうち2つか3つが過ぎていった。

「何を言ってるんですか」

ヤシロくんの喉から言葉がしぼられる。

「意地張ったって無駄よ。ボク、まだプレゼントもらってないでしょう。おばさんずつと探してたんだから」

ミニスカサンタはヤシロくとトナカイを何度も見比べる。

「人違いじゃないですか」

いささか強引にたたみかけたヤシロくんの言葉に、おばさんは眉をひそめたようだったが、すぐに元通りふくよかな頬によく似合う笑顔に戻り、「人違いだったのね。ごめんなさい」と言っつて、門を敏捷なジャンプで飛び越した。

「何なんだ、あのオバハンは」

高柳は腕組をした。あたしからしたら幽霊のあんたも十分「何なんだ」の対象だよ、と言いつ返そうと思ったけど、やめた。

ヤシロ少年は無口になって、おばさんの去った方角を眺めていた。

除夜の鐘を聞くあたしの脳裏にふと浮かんだのは、「とんぺえ」だった。それはコンビニで158円、スーパーや薬局なら132円で売られている緑のパッケージのカップ麺だ。カップ麺だが、ラーメンでなくソバである。今夜あたしが外に出ていたのは、その「とんぺえ」を買うためであった。ここ数日、時間は惰性で流れた。うつむいたままタツヤがあたしの部屋を出てからの時間は、ひどく無秩序だった。感情の大きな波が時間を飲み込んでしまったようだった。あたしは時間に秩序を求めた。秩序があればどこか立ち直る気がしていた。だから「年越しソバ」を。電気ポットに沸かしたお湯を注ぎ、麺をふやかす3分を荒振田寺の除夜の鐘を聞きながら待ち、味の濃いスープにひたされた麺を割り箸ですくって、思い出を食べるみたいにソバを食べて、そうして新しい年の新しい日を迎える頃、あたしの心は浄化され、過去のこととは過去として、これからのことをこれからとして、未練も煩惱も、鐘の中に詰め込んで、生まれ変わればいいと思ったのだ。それが幻想だと知りながら。

ところが、実際のあたしはこうして野良犬に財布を盗まれ、幽霊に取り憑かれ、救

い主のように求めた「とんぺえ」も、待ち望んだ除夜の鐘も、こうして無為に過ぎて行き――

――気がつけば、鐘は終わっていた。

1月1日がやってきた。全地球的に、ではなく、日本に。

そしてそれは、まったくもって現実感のないものなのだった。

「ア・ハッピー・ニュー・イヤー」

高柳氏がその低い声で、カタカナの発音で新年を述べた。あたしとヤシロくんは高柳をじっと見たが、新年の挨拶を返す気は、とてもじゃないが起きない。

「どうしたの？新年だよ」

高柳氏はあたしたちに挨拶を促した。あたしは、あつ、と思いついた。彼の言動は大学時代のゼミ仲間似ている。その人、糸井くんは高柳氏ほどではないが肉付きが良かった。声は高柳氏より高かったが良い声をしていた。歌はべらぼうに上手かったが、マイクを握ったら離さない。成績も良く質問も多かったため教授にはかわいがられたが、高慢な態度と斜に構えた視線が、あたしたちは苦手だった。

その糸井くんに、高柳氏は、よく似ている。

「新年をお祝いするのって大事だよ。ほら、我々は日本人だしね。伝統は守るべきだ。」

そもそもは祖霊への感謝の念が込められている行事だしね。ああ、こうして伝統はすたれていくのかねえ、嘆かわしい」

糸井くんは自分の得意分野になると俄然饒舌になった。また、他人を小馬鹿にする話題を好んだ。今の高柳氏のように。

「その靈感少年なんか、おせちや雑煮を馬鹿にしている類だろう。お年玉きちんともらってるかな？お年玉にもきちんと由来と意味があるんだ。お金だけもらって喜んでるようじゃ、日本は任せられないね。まあ、靈感少年に任せられる日本なんてどこにもないけれど」

一体どうすればこんな人馬鹿にした物言いが出るのだろうか。まして相手は子どもなのだ。高柳氏は自分の演説に夢中で全く周りが見えてない様子だ。

「とりあえず、ここ、出ませんか？」

あたしは提案すると、門に向かって歩き始めた。調子に乗った高柳氏はリズムカルに「いいことを言う。出ましょう出ましょう。除霊も失敗したことだ」と、余計なことも言った。除霊を行う前よりずっと、あたしは今、彼を追い払ってしまいたかった。

「誤解されているようなので言っておきますけど、僕はお年玉をもらっていませんよ」
門を乗り越えたところでヤシロ少年は口を開いた。前髪が邪魔してよく見えないが、
睨み上げているようだ。

「お年玉どころか、クリスマスプレゼントももらっていません」

おや、とあたしは思う。このタイミングで「クリスマスプレゼント」という単語が出てきた。先ほどのおばさんと少しつながる。同じことを考えたらしいデブ柳氏が「へえ」と、ニヤリと笑う。しかしそれより先にヤシロくんが演説を始めた。

「クリスマスはプレゼントをもらうとか、お正月は1月1日からだとか、過去の誰かが過去の生活や経済に合わせて定めたルールに振り回されるのはずいぶん不自由だと思えますし、僕は価値を見出せません。信仰がない現代日本で、それらがどんな意味をもつというのでしょうか。ばかばかしい。時間は有限なのだから、自分で決めた速度で、自分のライフイベントをこなすほうがよっぽど重要です」

それは一見しっかりしているように聞こえるけれど、噛み砕けば「マイペースが一番」ということである。ごもつとも、という気もする。一方であたしは飲み込めない。

高校を抜け出て「浮浪者アパート」の公園に出た。何度撤退命令が出されても減る気配のないホームレスたちの「アパート」だが、今夜は数が少ない。毎年元旦零時から荒降田寺で甘酒の無料サービスを行っているから、多くはそこに向かったのだろう。もしかしたら、と、一抹の期待を抱いて先ほどのじいさんを探すが見当たらない。

ヤシロくんも公園をぐるりと見渡した。そういえば彼は誰かを探しているのだった。「お姉さん、お姉さんが見たというホームレスは、ここにいますか？」

あたしは首を横に振る。ここにいる数名は皆同じ顔と同じ服装に見えた。よくよく見るとそれぞれ違うのだが、彼らは簡単にカテゴライズできるほど見分けがつかなかった。まるで「高校生」のようだ。その中に目を凝らしても、あのじいさんはいなかった。じいさんも甘酒サービスだろうか。一人一杯という決まりがあるが、配る人もひとりひとりの顔を覚えているわけではないので、性根たくましい人間は何杯ももらいに行く。これは無論ホームレスに限らない。

「：確かに、僕も何も感じない」

ヤシロくんは腕組をして考え込んだ。ヤシロくんと高柳氏はよく似ている。

あたしはベンチに腰掛けた。古めかしい木製のベンチは夜に冷えて湿気を含んでいた。お尻が冷たかったけれど、なんだか急に疲れがこみあげてきて、そこを立つ気にな

なれなかった。

また、今夜のことを反復する。

「とんぺえ」を買おうと家を出たこと。じいさんに会ったこと。犬に財布を奪われたこと。幽霊に憑かれたこと。少年に振り回されていること。ミニスカートのサンタクローズが現れ、いなくなったこと。年が明けたこと。

驚くべきは、これらの不可思議で不愉快な出来事は、全て1時間以内に起きたということだ。ピンポイントで世界があたしを不幸に陥れようとしているかのようだ。

うろろう腕を組んだまま歩くヤシロ少年を置いて、高柳氏はあたしの隣に座った。幽霊の彼に物質を上手に扱うことができるのか、と思うのだが、出来ている。

「ねえ」

そういえばさつきヤシロくんに「デブの姿はお姉さんと僕にしか見えていない」と注意されたのだった。ということは喋りだしてから気がついた。

「あんだ、どうしてあたしに取り憑いたの」

ちら、と横目で彼を覗いたが、彼は目を合わせなかった。話も合わせなかった。いや、合わせないどころではなかった。

「芽衣ちゃんは どうして彼氏と別れたの」

どうしてって、どうしてそんなこと聞くの、と、こめかみがひきつるのを感じながら返事して、それから、こめかみのひきつりは消えた。多分顔色も消えた。

『芽衣ちゃん？』

30分前の記憶を手繰り寄せる。人間の記憶なんてあやふやなのだから、確信はない。だから、記憶にあたしの習慣を加味してもう一度考えた。やはりおかしい。

ヤシロくんに手を握られた後、姿を現した高柳氏は「ちわ、高柳です」と言った。あたしはそれに「鈴木です」と答えたはずだ。一般的な成人済み日本人であればファーストネームで自分を名乗ることはしないし、通常あたしは姓で自己紹介をした。

その後もヤシロ少年はあたしを「お姉さん」と呼んでいたし、高柳があたしを名指しすることはなかった。それは今が初めてだ。

芽衣、という名は教えていない。

彼氏と別れたことに至っては、一部の友人にしか教えていない。実家の両親にすら教えていないのだ。

「どうして」

次はそう言うのが精一杯だった。

高柳氏は、にやあ、と、うつすら気味悪い笑い顔を浮かべた。幽霊と呼ぶにふさわ

しい表情。

「一週間前だったかな。あの踏み切りで、電話していただろう」

思い当たった。タツヤがいなくなつて2日経った夜、寂しさにやるせなくなつたあたしは、コンビニに夕飯を買いに出掛けた帰りに彼に電話したのだ。メロドラマのように「もうやり直せないの」「話し合おうよ」と涙ながらに嘆願した。人通りの少ない夜道であるのをいいことに、あたしは無謀な願いばかりを唱えた。

「俺はあの踏み切りにずっといたからね。君たちのことも当然知っていたわけさ」

嫌悪感。糸井くんもたまにこんな顔をした。同じ文学科にいた亜由美ちゃんに話しかけるときにこんな顔をしていたので亜由美ちゃんは糸井くんをひどく嫌った。あたしも糸井くんが好きではなかったが、そんなに嫌わなくてもいいだろうと思っていた。しかし今はよくわかる。この世界に存在する欲望を凝集させるとこんな表情になるんじゃないかと思う。そしてそれが向けられているのが自分であると考えると、彼が幽霊であることを排除しても身震いせずにはおれなかった。

「よくキスしてたよね、あの踏み切りで」

そうだ、こういう人間は言わなくてもいいことを言うのだ。たしかにあたしとタツヤは人の目がないとわかったらキスをした。だがそれも秋口までの話だ。ぎくしゃく

し始めてからは、手をつなぐことさえためらわれた。何か言おうとして言いだせない
タツヤの瞳が、蘇る。一部始終を見られていたのだという気恥ずかしさと、それらが
全て過去の話であるのだという痛みとが混ざった。

「傷ついちゃった？」

傷つけるつもりで言ったのだらうに、高柳はニタニタしながらこちらの目をうかが
う。あたしが質問したときには目を合わせようとしなかったくせに、自分の投げた小
石が起こす波紋の大きさは気になってたまらないのだ。殺意はこうして芽生えるもの
か。どうしてヤシロくんはこいつを除霊してくれなかったんだらう。

「あんた、子どもね」

唐突にアルトの音域が耳に響いた。顔を上げると、さきほど敏捷なジャンプで門を飛び越えていったおばさんが目の前にいる。いつのまにここに来たのだろう。

「女の子にはもっと優しくしなさいな」

そう言いながら、高柳氏のいる場所に腰掛ける。慌てて高柳氏は席を離れる。

「それよりお嬢さん、少年がどこに行ったか知らない？」

あたしは辺りを見渡した。いつの間にかヤシロ少年の姿が消えている。そして、彼女には高柳氏が見えているらしい。「お姉さんと僕にしか見えない」と言っていたのは嘘で、本当は高柳氏の姿は皆に見えているのかもしれない。だとすると彼は幽霊ではないのかもしれない。

おばさんは赤いジャケットのポケットから煙草とライターを取り出すと、「失礼」と言って、火をつけた。黄ばんだ電灯に、白い煙が昇っていく。

「まあ、いいわ。そのうち自分から来るでしょう。あの子もウンザリしているだろうからね。クリスマスって、本当は一晩だけだもの」

落ち着き払った態度と、それにそぐわない真っ赤な服装に慣れないあたしが「へえ」と所在なげに返事をする、彼女はこちらを見た。その瞳は力強く、キラキラとしている。

「これも何かの縁ね。あたし、おばサンタ。よろしく。あなたは？」

オバサンタ。その単語を最初は何の抵抗もなく受け入れ「鈴木です」と名乗ったが、すぐにそれが「おばさん」と「サンタ」を掛け合わせたものだ気がついた。本名だろうか。そんなわけないなあ。

その不躰な疑問を遠慮もなく聞けるのは高柳だった。

「おばサンタ、ってギャグじゃないでしょう。本当は何て言うんですか。ちなみに僕は申し遅れましたが高柳行弘。彼女は鈴木芽衣」

勝手にフルネームを紹介されて不愉快だ。

だがそれをたしなめたのはやはりあたしじゃなかった。

「勝手に女の子の名前を他人に教えるもんじゃないわよ。あたしは本名も何も、おばサンタ。記憶が始まってからずっとこの名前と呼ばれているわ」

これまで傍若無人に振舞ってきたデブ柳氏は居心地悪そうにした。あたしはたまに彼を心の中で「デブ柳」と呼んでいるが、おばサンタも結構な恰幅だ。しかし、彼女

を「デブ」と称するのは気が引ける。彼女は二度も私に味方してくれた。それにふくよかな中年女性は悪いものではない。

「記憶が始まってからずっと、生まれたときからおばさんだったのか？ 笑止千万」
笑止千万、なんて言葉を普段使いする人間、いや、幽霊をあたしは今初めて見た。
「そうよ」

おばサンタは、煙草の煙を口から出すのと同じくらい当たり前前に答えた。高柳氏は丸い顔についた細い目を丸く見開く。「意味わかってるのか？」

「あたしはね、生まれてこの方ずっとこの姿なの。そういうシステムよ、この業界は。本当に言葉は言葉なのか、本当に地球は地球なのか。あたしが生まれながらにおばさんであることを疑うのは、それらを疑うのと同じことよ」

彼女の論法で行くのなら、あたしの救い主であるかと思われたこの女性が事態を複雑にするだけの存在であった、という事象に対して疑問を抱くな、ということになる。

防衛機制のようなもので、あたしは事態を一度受け容れた。受け容れねば、あたしは「なぜに」「どうして」「本当は」という疑問符に埋もれて我を見失ってしまうところだった。

それから、急に冷静になって周りを見渡す。茂みにはビニールシートや段ボールで

巧みに作られた寝床がある。そこで横になっている姿がいくつも見られたが、彼らはいずれもあたしたちを気にしていないようだった。

おばサンタの声は大きいし、あたしもごく普通の声量で喋っている。もしもあたしがこの状況に傍観者として立ち会おうとしたら、異常さに慄いて逃げ出すだろう。それとも、彼らはあたしたちと関わりあいたくなくて無視しているのだろうか。或いは、全て承知してるのか――だとしたら、みんなみんな、ここの浮浪者たちも、高柳も、おばサンタも、ヤシロくんも、みんなみんな、あたしを陥れるために手をつないでるっという可能性が出てくるではないか。あたしは腕組みをして、推理を始める。

「彼ら」の目的が、あたしの財産であったと仮定してみる。アルバイトで一人暮らしをするというのは、当然ながら厳しい。学生の頃よりいくらか減ったとはいえ、まだ実家から仕送りがあるからやっていける。あの財布には2万円。電気代・水道代等引き落としがされて、あたしの口座はかなり寂しい。繰り返すが、次の給料は半月後だ。キヤッシュカードもクレジットカードも、あの財布の中にある。そのクレジットカードだって、全ての公共料金の支払いに使っているから、カード引き落とし日が過ぎると利用可能額の残高は激減した。そんなクレジットカードに盗む価値は無い。あの財布も当然ながら盗む価値はない。じゃああたし自身になんらかの価値があるのか？

といえば、それは財布以上に他人には価値のない。

あたしの推理は早速行き詰まった。そもそも子どもの頃からなぞなぞブックの類は最初から回答ページを見るタイプだったのだ。シャーロックホームズだって名前しか知らない。

とりあえず不安と疑念を払拭するため、イチかバチかでフツかけてみることにした。

「ねえ、おばサンタ、あの犬、どこに行ったんでしょね」

おばサンタはきよとんとする。

「犬？どの犬のこと？」

そのきよとん、とする様子が「いかにも」という気がして、あたしはいよいよ疑いを強くする。

「財布ですよ」

たしかあたしは、財布を盗られたという話を、ヤシロくんにも、高柳にも、おばサンタにも、していないはず。ここの反応で判断が分かれる——と、思ったが、おばサンタはやはりきよとんとして「財布？財布がどうかしたの？」と、煙草の灰をブーツでもみ消すだけだった。それは、ごまかしているようにも見えたけれど、全く知らない様子にも見えた。高柳を見れば、相変わらずニタニタしている。こめかみの辺りがひきつった。

「高柳さんは、ご存知でしょう？あたしの名前も知ってたくらいなんだから」

すると高柳氏はあたしにびったり張り付いてニタリ、と、口から血を流して見せた。

あたしはつま先からお尻、背中、首筋、と、ザザザ、と、皮膚が走るのを感じた。糸井につきまとわれた亜由美ちゃんに、今更ながら同情する。

「残念。芽衣ちゃんのことを全部知りたいのは山々なんだけど、俺も完全に自由じゃ

ないからね。あのとき、きみがあそこで俺を見つけてくれなかったら、ずっと線路に縛られていたんだから。線路に起こった出来事以外は、全く知らない」

「あたしがあなたを見つけた？」

「見つけてくれただろう？」

突然に遠近感を失う。ゴーツと音がして、頭の中に二つの眩しい黄色い光が見えた。通過電車。電車が行過ぎる、その名残の風に吹かれて、赤い彼岸花。季節はずれだな、と感想。あつ。

「あのとき！」

ご名答、と、高柳はあたしからスイツと離れた。

「本当は、あの時以外も咲いていたんだがね——」

語尾を隠したその言葉は、妙に心に残った。言葉が、というよりも、高柳の目が一不意にあたしは息が詰まりそうになった。不思議なくらい思い起こさせた。タツヤの視線を。

何もかもがまざまざと蘇った。あの日のタツヤの、唇の動き、声のトーン、自転車のロックを外す音、玄関を踏む靴下の音、部屋のキイを返したときに触れた温度……

…

唐突な衝動にもものも言えず、ベンチを降りてあたしはうずくまった。

——涙は十分流したのだ。もう泣いたって仕方ないって、決めたから「とんぺえ」を食べることにしたんだった。

泣くもんか、泣くもんか。泣くもんか、泣くもんか、泣くもんか、泣くもんか……

うずくまって涙と声をこらえるあたしの肩を、誰かがぽんと叩いた。

顔をあげると、薄汚れたコートが見えた。

(あのじいさんだ！)

あたしは目を見開いて顔を見た。

「さつきから独り言ぶつぶつ言って、苦しそうにして、どつか悪いんかね」

目の前にあったのは、さつきのじいさんは全く違う、四角い顔を寒さで紫色に染めた老人だった。頭髪はまるきりなかった。他の人より防寒具が一箇所足りないのだから顔色がこんなになるのも無理はない。

「あ、いえ……」

あたしはそうとしか言えず、立ち上がった。今の今まで心に渦巻いていた感情も思い出も、あつという間にどこかに消えた。代りに気恥ずかしさがやってきた。

高柳が「演劇やってるんです、って言え」と、ささやいた。あなたの姿も声も他の

人に届かないのだから、囁く必要はないでしょう、と思ったけれど、彼の言ったとおりに「実は、演劇をやってまして…」と言い、その言葉に老人が「へえー」と感心したのを確かめると「もう帰って寝ます」と、強引に会話を終わらせた。公園を走って抜けて線路方面の通りに出る。遠くから「頑張れよ」と声が聞こえたが、振り向かなかった。

「ありがとう、高柳さん。今回ばかりは感謝するわ」

公園と線路の間の細い通りに出ると、あたしは小声で話しかけた。あたしたち以外に誰の姿も見えなかったが、またどこで誰が聞いているとも知れないのだ。

「礼には及ばない」

と、これもまた芝居がかった口調で高柳が言った。

「それより、あのミニスカオバハンはどこへ行ったんだ？それに、ホームレス野郎が言っていたな。『独り言をぶつぶつ』って。彼らにはオバハンの姿は見えていなかったということか？」

言われてみればその通りだ。もしもお婆サンタの姿が見えていたら、その服装の奇異さ故に彼女は注目を集めただろう。けれど見えていたのがあたしだけで、あたしは普通の格好をしていたから、彼らは特に注目もしなかったのだ。独り言を言う変な子

としか見ていなかったのだ。では彼女は一体何なのか。

あたしは高柳をじっと見た。これまでにないくらい直視した。高柳もあたしをじっと見た。

「俺の仲間ではなさそうだ」

「そうだね、それならあの子が気がつくだろうし」

「でもあいつは知っている様子だったな」

「そういえば、そう。：ねえ」

あたしは、数分前まで葛藤していた疑惑を確かめようと思つて、やめた。突然に気がついたので。高柳氏は、財布泥棒ではない。根拠はない。根拠を提出するならば、今、おばサンタの存在についての疑問を共有しているという点だが、それだけではな気がする。ことさらな理由もなく彼を嫌ったことを少し後悔した。そして、推理の代りにいくつかある疑問のうち、ひとつを挙げてみた。

「なぜあたしに取り憑いたの。花を見つけたから？けど花が咲いていることに気がついた人なんて、いくらでもいたでしょう」

高柳氏はすぐに視線を外し、それからまたニタアと笑ってみせる。

「まず、あんなにラブラブだった彼氏と別れた理由を教えてもらわないと」

やはり彼は高柳ではなく、デブ柳だ。

あたしは話題を変えた。

「ヤシロくんがどこ行ったか知らない？」

デブ柳は、肉に埋もれかけた細い目をさらに細くして、「話をそらしたね、芽衣ちゃん」と、あたしの名を口にした。愉快なものではない。あたしは無言で口の端に皺を寄せる。と、薄っぺらな高い声がした。

「ここですよ」

線路を挟んだ向こうの道から黒い塊が現れると、点滅する街灯にパカパカその正体を照らされた。前髪で顔の半分が覆われている、ヤシロ少年だ。彼は有刺鉄線を器用に広げてくぐると、線路を小走りに渡って、もう一度有刺鉄線に挑み、難なくクリアする。

「お姉さんの見たホームレス、やはり僕の探している人物のようです」

有刺鉄線と有刺鉄線の隙間から首を出した途端に彼はあたしの目を見て告げる。あたしの目を見ると言っても、前髪で彼の目は隠れているのだから正確ではないのだけれど。それから、彼はすぐさま這うように身体を地面につけると、「ニオイですよ」と

言った。「まだこの近くにいる」。

またも陶酔している雰囲気のヤシロ少年を薄笑いで迎える高柳は、鼻の穴を広げてわざとらしくヒクヒク動かした。

「俺には何もにおわないな。一体どんな二オイがするっていうんだ」

あたしにもまったく二オイはしなかった。あのじいさんの二オイだったら覚えている。それは個人を識別できるような二オイではなくて、路上居住者全般を象徴するかのような二オイであった。

ヤシロ少年は高柳の嫌味に動ずることなく、匍匐前進で道を進む。このあたりは電灯も切れかけだし人通りが少ないから良いが、荒降田寺に近くなれば初詣の人に溢れているだろう。あたしは身構えた。もしも人が近づいたら、他人のふりをしよう。それよりも、彼についていけないほうが賢明かもしれない。

それでもあたしの足がヤシロくんの足元から一定の距離を保ち続けるのは、じいさんの存在が気になるためであった。

「あのじいさんは一体何なの」

あたしが問うと、ヤシロくんは、這ったまま「幽霊でないことは確かです」と答えた。それは高柳も同調するようであった。「霊がこのへんにいると言うなら俺が気がつ

くからね。ボクちゃんの話が正しかったとすれば」

「幽霊ではないけれど、霊体である可能性はあります。つまり、人間や犬や猫ではない生命体ということですよ」

それって宇宙人みたいなものかしら、と、思ったけれど、言ったら馬鹿にされるだけのよな気がしたので黙っておくことにする。

「へえ。じゃ、さっきのおばサンタもその類か？」

高柳の言葉にヤシロくんが立ち上がった。立ち上がってどうするわけでも何を言うわけでもなかったが、口元をゆがめると、肘についた泥を払い、あたしに背を向けるとまた歩き始めた。あからさまな反応に手応えを覚えた様子で高柳は調子に乗る。

「クリスマスプレゼント、もらったほうがいいんじゃないの？ボクちゃん。オバハンはきみを探していたぜ。もつとも、オバハンの読みでは、きみが自ら突撃するそうだけども。…この話、触れて欲しくなかったかい？だとしたらごめんよ」

セミを殺す猫を見たことある。猫はジジジ、と欠けた羽を擦り合わせるセミを片手で転がして、口にくわえ、また離し、爪の出た前足でまた転がす。それを繰り返すうちにセミの羽音はしなくなるのだけれど、動かなくなっても猫はしばらくセミで遊んでいた。それを思い出した。高柳は傷ついている人間の傷口をさらに広げ、相手が恐

らく泣いても怒っても、やめることはしないのだろう。それとも、わざと相手の感情を昂ぶらせて「反応が得られた」と喜んでいるのだろうか。心の寂しい人間はそういうことをするかもしれない。彼は寂しいのかもしれない。

「クリスマスプレゼントって声変わりしたらもらえなくなるって知ってたか？もらってやってもいいんじゃないの。どうせきみは将来この先もずっとモテないよ。せめて子どものうちにオバンにモテておけよ」

ヤシロくんは唇を閉ざしたまんま歩き続ける。踏み切りを北に越えて、また高柳が「へっへ、結局俺を除霊することすら出来ていないしね。ママのおっぱいが足りないんじゃないか」と、得意な顔で言う。あたしは、ヤシロ少年のことも快く思っていないかったけれど、それ以上に高柳が気に食わなかったので、線路の砂利を脇に蹴った。あの彼岸花に当ててやれ、と思ったのだ。けれど彼岸花は見つからなかった。

次第に人通りが増える。振袖を着た女性が数人で連れ立っている。予定ではタツヤと一緒に来るはずだった。崩壊した予定があたしの胸にガラガラとなだれ込んできたので、気を紛らわせようとヤシロくんに話しかけた。

「どうして、あのおじいさんを探しているの」

ちら、と、こちらを振り返ると、首をうなだれる。

「奴は、僕から能力を一部奪ったんです。それで、僕は除霊が十分出来なかった」

あたしは驚いた。彼の言葉はどこまでが真実なのか常に疑わしかったが、彼の言葉が実際だとするのなら、彼は老人から能力を「奪われ」、あたしは（犬とじいさんが共謀していることを前提として）財布を「奪われ」た。

「新月の晩でも、力は発揮できたはずなのに」

本当に悔しそうな顔を見ると、再び高柳に目を向けた。目というか、前髪角度であたしはそれを判断している。高柳はわざとらしく口をゆっくり動かし

「そ、れ、で、ク、リ、ス、マ、ス、プ、レ、ゼ、ン、ト、は、ど、う、す、る、の」と言ったので、ついにヤシロくんは感情を昂ぶらせた。高柳は嬉しそうにヤシロくんの言葉に耳を傾ける。

「しつこいな！クリスマスが何だって言うんですか。クリスマスにプレゼントをもらうなんてただの商業戦略だし、大体が日本の慣習じゃないですね。それに、クリスマスだとか、お正月だとか、カレンダーにこだわるのは、自分の時間に自信がない証拠だ。人生に区切りが欲しくて現代人が仕掛けたアラームでしょう。僕は違う。僕は自分の人生の歩き方を見極めてる。僕は自分でものが見れるし、自分でものが考えられる。だから必要ないんです。僕はクリスマスもお正月もお盆もいらさないんだ。だから、

僕に関わるな！」

その言葉をあたしは半分も聞いていなかった。アラムがどうたらというところまでは聞いていたし高柳が何かを言い返していた気もする。でもそれとはまったく関係なく、あたしの瞳孔は瞬時に大きくなり瞬時に小さくなったことだろう。そのとき息が止まっていたかもしれない。

荒降田寺は丘の上にある。ごくごく小さなお寺だ。さほど遠くない距離に犬壺湾があり、そこから初日の出が見れるというので、海に向かう人も少なくない。簡単に元旦気分を味わいたい人や地元民が、荒降田寺の主な参拝客だった。あたしも去年はその一人だった。タツヤと一緒に甘酒をもらいに行つた。「ずっと一緒にいられますように」と祈つた。その願いは脆く崩れ、あたしの新年はろくなことがないみたいだ。

——参拝客の中にタツヤがいた。

タツヤは、濡れた髪を肩で結つた女の子と、親しげに寄り添い、階段を荒降田寺に向かつて登り、少しだけ口付けを交わし、彼女に頭を叩かれて、また睦まじく階段を登っていった。そのまま、人に埋もれて見えなくなった。

——知つた。

あたしは何も言わず踵を返した。

だってヤシロくんも高柳も、本当は全く面識のない他人だし、そんなことを考える余裕もあたしにはなかったし、このまま荒降田寺に行つたところで、あたしはタツヤの頭を探してしまふだろうし――。

足が震えている。

歩くたびに膝から下が小刻みに震えていることに気がついて、ちよつと可笑しかった。なので笑おうと思つた。唐突にじいさんの言葉が頭に浮かんた。「笑えばいいんだ」。口の中に、まるやかな塩味。あたしはそれを知っている。どんな料理にも滅多に使われないだろうこの味は、涙というのだ。笑えばいい？笑えば？たしかに今のあたしはお笑い種だ。鼻水も出てきていることに気がついた。ジュル、とすすると鼻の奥が痛い。笑おうか？声を出そうとすると、顔が熱くなつてきた。

元来た道に戻ると、線路に出た。

後ろから誰かが走ってきた。きつと少年だ。

高柳の声がした。「おい、さっきの彼氏じゃなかったのか」。あたしは振り向かない

し答えなかった。

ヤシロくんの声が聞こえた。「え、ふられたという恋人ですか」。

あたしには黙って歩く権利があると思った。

高校生は高校生として特権を持っており、ホームレスはホームレスとしてファッションが存在し、失恋した人間には失恋した人間だけの我侭が、多少許されるはずなのだ。許されるべきなのだ。

泣くもんか。泣くもんか。でももう泣いている。除夜の鐘は何も消さなかった。

あたしは知っていた。秋を過ぎたくらいから、何かを言いたくて言えないタツヤの唇が、あたしだけのものではなくなっていたことを。あたしのアパートに置いていた自転車で、別の誰かに会いに行っていることを。

ヤシロくんが追いついてあたしのコートの裾をつかんだ。

「ヤシロくん。現代人はアラームが欲しいからクリスマスを恋人同士で過ごすの？」
声が思った以上に震えていて驚いた。

「そんなわけでも…必ずしもそういうことでは…あれは…」

困った口ぶりで、少年はまごついた答えをした。あたしと高柳は何が違うのだろうか。小さな子どもを困らせてどうしたいのだ。

「これからお正月を一緒に過ごして。節分とか、バレンタインとか、ひな祭りとか、エイプリルフルとか、ゴールデンウィークとか、海の日とか、お盆とか、お月見とか、それから次のクリスマスも、恋人たちは、一緒に過ごすの？アラムのために？」
ヤシロくんは黙ってしまった。

「違うよ。そうじゃないよ。クリスマスも、お正月も、恋人たちが一緒に過ごすのは、そんな難しい理由じゃないよ」

あたしは息苦しくなっちゃがみこんだ。泣き続けると呼吸が難しくなるのだ。風は冷たいというのに、あたしの顔は熱かった。そのくせ濡れた肌に風が吹き付けて痛みを与えた。

——自信がないのは自分の時間ではなく、恋人とのつながりに対して、だ——
2年前も1年前も、クリスマスには商店街のケーキ屋で小さなケーキを買った。フーストフードでハンバーガーとチキン、コンビニでチューハイを買い、あたしの部屋で一緒に過ごした。大晦日になれば一緒に荒降田寺に行き、甘酒をもらって帰路に着き、確かめ合うようにキスをして——あたしたちは、いつも確かめ合っていた。だってあたしたちに証拠はなかったから。恋人たちが恋人同士であることを証明する確かなものはどこにもなかったから。押し寄せるようにやってくるイベントや記念日の波

にまかせて、恋人らしく振舞うことで、あたしたちは自分たちを確認したのだ。それらの確認する行動は、外部の人に「恋人たちである」と知らしめる役割を持っていて。だからあたしは、あの日、「今年はこのチキンにする？」と、踏み切りを渡って聞いた。つないでもらえなくなっていた右手を持って余して、バッグの留め金をパチンパチンといじりながら。「期間限定で、ガーリックが出てるでしょう。チーズをトッピングして食べるとおいしいんだって」。タツヤは答えなかった。両手をポケットに突っ込んでいて、あたしに触れる隙を与えなかった。「年末休みは29日からもらえるって」話題を変えてもタツヤは無言だった。「今年もお寺行こうね」と言ったけれど、それが無理だったことに気づいてた——認めたくなくて実家に帰る予定は作らなかった。

それから、気づけば、誰とも過ごさないクリスマスが過ぎて、たった一人の年末がやってきて、除夜の鐘はあたしを去年に置いてけぼりにしながら過ぎた——

「芽衣ちゃん。俺、女子高生が好きなんだ。」

突然に頭上で声がした。高柳だ。彼は線路に半透明の身体を滑り込ませてこちらを見ている。

あまりに突然だったのであたしもヤシロくんも返す言葉もなく彼を見た。

「曾古野高校に、可愛い子がいてね。アイちゃんって友達に呼ばれてた。童顔で、ま

つげが長くて、いつも友達に囲まれてた。毎朝、仕事に行く時にあの踏切で彼女とすれ違ふんだ。俺がデブだって笑われてることは知ってたけど、すれ違ふときに香るシヤンプーがたままなくてね。彼女と同じニオイのシヤンプーを買って部屋に置いたくらいだ。

けどあまりに毎日見すぎていたんだろうね。俺は彼女に髪の毛一本触れていないのに、ある日痴漢にでっち上げられた。ずいぶん酷いことを言われた。会社でも後ろ指さされたし。けど、アイちゃんがこつちを指差しながら『気持ち悪い』って、俺のこゝと話してるのは、ちよつと幸せだったなあ。俺のこと考えてるんだって思うと」

なぜ、いきなり彼の変態趣味について聞かされるんだろうか。高柳は恍惚とした表情を浮かべてからすぐに線路に目を落とした。

「それから1週間後、通過の特急電車に飛び込んだ」

ゴーツと風が起こった。背中が凍る。デブ柳の半透明の身体がバラバラになり、赤いものが巻き上げられて散った。

「これがそのときですか」

ヤシロ少年の問いに答えるようにして、高柳の身体は元に戻った。けれど先程と違って真っ赤な血に塗れていた。その血はよくよく見れば彼岸花の花びらだった。そし

て高柳の身体から花がはらはらと落ちると、線路脇に咲いた。あたしはずっとゾクゾクしていた。引き寄せられるように、有刺鉄線を押し上げた。コートにトゲがひっかかる。

「お姉さん！」

ヤシロ少年があたしのコートを引っ張る。あたしの腕からコートが脱げた。一気に身体が軽くなり、どしん、とヤシロくんとコートは地面に倒れた。

線路脇の道はひどく狭いのに、線路は広く、妙に拓けている。

「芽衣ちゃんも、俺の所為で泣けばいいと思ったんだ」

電車の本数が少ないのでこの線路は早くに眠りにつく。なのに、電車がやってきた。

赤いボデイのローカル列車の車体。ライトで前を照らしてこちらに向かってくる。匿名女性として朝のニュースに報道される。匿名にすることに体面以上の意味がない世の中なので、すぐにあたしは特定されるだろう。そうしたらタツヤは泣く？あたしの所為で、そのときあたしのことを思って。

「お姉さん、だまされないで！」

ヤシロ少年の声はしかしずいぶん遠く――

コン、と、何かが頭に当たってあたしは我に返った。

列車はどこにもなかった。目の前に広がるのは、終わりが見えない線路、それを一定の間隔で照らす照明。有刺鉄線をくぐって「イタツ」と言いながら、こちらへやってくるヤシロくん。そして、肉に埋もれそうなその細い目に、言いたいことを隠した、高柳氏。

あたしは足元に落ちたものを手に取った。個包装された、キャンディ。これがあたしの頭に当たったのだ。ヤシロくんが投げたのだろうか。

「わし」

声に出さない言葉を見透かすかのように、放たれたその言葉の主は、

「おじいさん」

ついつい声に出してしまった。1時間ちよつと前、あたしを不幸のどん底に陥れた張本人。汚い服装、ぼさぼさの眉毛、赤黒い顔。そして、その足元でちよこんと座っているのは、白いんだか、黒いんだかわからない犬——財布はまだくわえている！

突然意識が起き上がった。

「財布」と、あたしが指差すのとほぼ同じ呼吸で、じいさんは

「飴ちゃんおいしいよお」

と言って、犬と一緒に線路を走って行ってしまった。それはとんでもなく早く、短距離走の選手のような。すぐに闇にまぎれて見えなくなった。あたしは慌てた。線路は犬壱湾駅方面に向かって伸びている。挟む駅は10駅くらいだろうか。けれど真っ直ぐ線路の上を走り続けるとは限らない。このまま線路の上を走って追いかけるか、それとも、

「追いかけてみましょう、お姉さん」

迷うあたしにわき目も振らずヤシロくんが走り始めた。砂利を蹴り上げながらヤシロくんの姿が小さくなる。あたしは高柳と目を合わせた。不憫な幽霊は顎を突き出して「行ったほうがいいんじゃないの、状況的に」と、あたしを促す。

あたしのスニーカーは砂利を蹴り上げた。

あたしたちはしばらく走った。高柳もなぜだかついてきた。幽霊なのにゼエゼエ言っている。

はっ、はっ、はっ、と、最初はリズムカルだった呼吸もやがて、ヒュー、ヒュー、と、息を吸い上げるばかりで吐き出すことに不器用になってくる。

3分に1回くらい、じいさんと犬の姿は闇に浮かび上がった。立ち止まりこちらを振り返ってニヤニヤ笑うとまた走り出す。距離を縮めるのだけれど、手が届きそうなところまで来るとまた猛スピードをあげて走り出し、振り切られる。その繰り返しだった。

ヨシローのことを思い出した。実家で飼ってた犬だ。ヨシローはときたま首輪をすり抜けて脱走した。一家総出で探しに行くと、散歩に使うルートの途中をウロウロしていた。そうして、あたしたちが追いかけてくるのを見ると、立ち止まって、舌を出したまんまのニヤニヤしたような顔で確かに笑い、また走り出すのだ。そしてあたしたちは姿を見失った。

まったくその状態だった。

あの老体のどこに、そんな体力があるのか。

4回目に振り返るじいさんを見失ったとき、枕木に足をとられて転んだ。レールで膝をしたたかに打つてとても痛い。おもわず涙が滲んだ。二十代も半ばを迎えて怪我で泣くなんてみつともないからいつもだったら泣かない。でも今日はもう泣き顔を見られていたし、走り疲れてそんなことを考える余裕もなかった。「うっ、うっ、痛い」と言いながら肩で息をした。ヤシロくんも足を不自然に揺らしながら近寄ると「大丈夫ですか」と、息なのか言葉なのか、その中間くらいのものを口にした。

「悪いが俺は限界だ」

幽霊のくせに完全に息が上がっている高柳が口を開けて線路に寝転がった。

「それに、もうすぐ次の駅だ。この時間は、まだ整備員がいるぞ」

顔を上げた先には、ホームの先端がある。陸橋でのぼり線とくんだり線をつなぎ、かすかに線路の脇からタクシーの明かりも見えた。

「線路を降りる？」

ここならまだ有刺鉄線をくぐるだけで線路から降りることが出来た。

「けど、あいつはこの線路を真っ直ぐ行ったんですよ」

ヤシロ少年はあたしの言葉に反発する。

「あんな非人間と同じにするな」

高柳が続けて言っつて、あたしはその言葉に同調し、有刺鉄線をくぐつた。ヤシロくんも不満そうにしながら後に続く。

線路を真つ直ぐ行つたのだとしたら、少なくとも線路沿いに進めばどこかで鉢合ふことがあるかもしれない。さきほどより広がつた線路沿いの道路に出ると、真つ直ぐの道を歩いて進む。

問題は、どこまで線路沿いに歩いていけるか、だつた。あたしの記憶が正しければ、線路はやがて川を越える。線路以外で川を越える方法は、だいぶ離れた場所にある自動車用の橋を通るのみだ。その道路に出るには、まず大通り側に出て、そこから左折して国道に出なければならぬ。川を渡つた後に線路に戻るのもその逆の手順が必要だつた。そしてあたしは、その道がわからない。だから、川を渡る前までに線路に乗る必要があつた。

けれど、あたしたちは川の問題につきあたるよりも先に問題に突き当たつた。駅を通り抜けると、そこから先は次第に線路の位置が高くなつてゐるのだつた。そして、人が通れるような道は線路から離れていこうとしてゐる。

「ダメだ、ニオイが遠ざかる」

ヤシロくんはコンクリートで作られた壁に足をかけた。ところが、「こらっ」と声が出て、明かりを向けられる。おまわりさんだ。

「何してるんだ。子どもが夜中に。こちらへ来なさい」

おまわりさんは手招きしながら懐中電灯を持って近づいてくる。ヤシロくんは壁から降りる。あたしは固まったまんま動けない。

「犬って言え」

また、高柳が囁いた。あたしは咄嗟に「犬！」と言う。おまわりさんは首をかしげる。「犬？きみ、この子の保護者ですか」

ヤシロくんがあたしのトレーナーの裾を引っ張った。

「お姉ちゃん、ポチあっち行ったよ。僕見たよ」

おまわりさんは、「ああ、犬がね」と、納得した。あたしは全然納得してなかった。確かにあたしたちは犬を追いかけているけど、ポチって誰。うちの犬はヨシローだ。

「ジャーキー買いに行こう、お姉ちゃん。おまわりさん、またね」

服を引っ張ったままヤシロくんは走り始めた。あたしは危うく転びそうになりながらもバランスを取る。おまわりさんが「ちよつと！」と、追いかけてきた。今まで真

面目に生きてきたというのに、警察の世話になるなんてごめんだ。まして新年だというのに。あたしは俄然必死に走り始めた。

高柳がついてこない。けど幽霊だし、あたしが心配してやる必要なんてないし、平気か：、と思いつながら犬壱市に向かう線路沿いを走り続けた。しばらくして後ろから叫び声が聞こえた。そしてすぐに高柳があたしたちの後をついてくる。

「権力を振りかざすタイプの奴は非現実的に脅してやるのが一番さ」
口から血を流したまま、ニヤリと笑った。たまに、頼れる。

線路は頭よりもずっと高いところに離れていった。横目に走り抜けたコンビニは、煌々と明かりを灯して賑やかに群れ立つ若者で溢れていた。それは日常なのか、或いは元旦の夜だからか。

「ヤシロくん、あのじいさん、どのへんかわかる？」

彼の敏感らしい嗅覚に期待をかけてみる。けれどヤシロくんは首を横に振る。それでは絶望的だ。息を切らした高柳が「もう無駄だってことだ」と情けない声を出した。それからニタリと脂汗だらけの顔に薄笑いを浮かべて「それに、俺としてはそのじじいがつかまらないほうが助かるみたいだし」と言った。

「今夜は、そうかもしれないですね。でも、月が出てくればあなたを冥府に戻すことは簡単ですから」

ヤシロくんの言葉に、汗を手のひらで拭き拭き、「へっへっへ、それまでに俺が芽衣ちゃんを取り込んでしまおうとしたら」と言ったが、脇に汗をかいているので全く怖くなかった。幽霊は汗をかくのだろうか…高柳は本当に幽霊なのだろうか。

「海です」

しばらく立ち止まって溝を見ていたヤシロくんが不意に顔をあげた。

「あいつは海ですよ」

説明もなく、再び歩き始める。高柳が溝を見て「ああ、落ち武者の霊か」と呟いた。あたしには見えないが、何かがいるらしい。そいつは、あのじいさんの行き先を知っているのだ。

「荒降田寺あたりは昔合戦があったからな。逃げ延びてきて冥府に行けない霊がこのへんをうようよしているんだろう」

と、うようよしている一人である高柳。

問題は、犬壺湾に向かう道筋を、正確に誰も知らないということだ。線路に乗ってしまえば、確実に行ける。犬壺湾駅から海岸までは徒歩10分程度だ。

「地図使う？」

「あ、おぼサンタ」

高架下の暗闇から赤い衣装の彼女が現れる。彼女はトナカイのモバイル機器のボタンを押すと、その画面をあたしたちに見せた。画面左下に東西南北を表す記号、確かに地図のようなデジタル画面があり、右下と左上の二箇所×印が点滅している。一

箇所が海で一箇所が現在地だろうか。それにしても何故突然現れたのか。そして何故あたしたちが海を目指しているのと知っているのか。一挙に疑問が湧いて出たが、考えないことにした。今夜はきつと、そういったことについて考えないほうが良いのだ。高柳氏は、おばサンタと少年の対面にほくそ笑んでいたが、あたしは一刻も早くじいさんを捕まえたかった。捕まえて財布を取り戻したかった。それはヤシロくんも同じらしく、おばサンタと高柳を見比べてからまた走り始める。

おばサンタはヤシロくんにも何も言わず、重そうな身体を軽やかに使って一緒に走り出す。ヤシロくんも無言。つられて、高柳も、無言。あたしも、無言。

はっ、はっ、はっ、から、また、ヒュー、ヒュー、と、苦しげな息に変わる。あたしはずっと長距離も短距離も人並み以下だった。ヤシロくんも泣きそうな顔をしながら走っている。

喉がからからだ。

溶けてしまいきような脳みそに、タツヤと彼女のキスシーンが蘇る。

息が苦しい。

走るあたしとヤシロ少年は、どんな風に見えるんだろうか。

ちらとそんなことを思ったが、それより詳しくは考えなかった。

いろんなことが頭を巡る。

じいさんに会わなければ良かった。タツヤがあたしのそばにいてくれればよかった。ヤシロくんを無視すればよかった。踏み切りを渡らなければ良かった。とんぺえは結局食べれなかったの、荒降田寺の甘酒は、ヒュー、ヒュー。今何時くらいだろう。本当に道合ってるのかな。財布、まだくわえてるかな。じいさん何者だろう。おばさん何だろう。ヒュー、ヒュー。実家帰ればよかったな。別れたことも素直に告げて、そうすればお母さんもお父さんも弟も、待っててくれたのに。ヒュー、ヒュー。高柳はいつまで取り憑いているのかな。ヤシロくんは本当に除霊できるのかな。あたし、だまされてるのかな、ヨシローは幸せだったかな。ヨシローはこんなに長距離走れたかな。あの犬、本当に犬なのかな。ヒュー、ヒュー。じいさんに会わなければ良かったな、タツヤはどうしていなくなったのかな、あたしが悪かったのかな、ヤシロくんに出会わなければ良かったな……

……でも、一人きりの年越しではなかったな。

どれくらい走っただろう。

町並みはすっかり変わっていた。田んぼばかりの地域はもう過ぎた。道路から迂回して川を越えた。住宅が減って工場が増えた。金属片や焦げたネジが足元に落ちていく。人影が増える。こまかな話し声が聞こえる。

「くさい」

ヤシロくんが呟いて、鼻にしわを寄せた。空気を吸ってみた。くさい。生活排水と、べつたり身体にしみつくような生臭さ。潮のおいだ。

さきほど越えた川は幾たびも曲がったり分流したりして、再びあたしたちの目の前に現れた。とても細い、どぶのように汚い川。空き缶やビニール袋が浮いている。ヘドロと闇とに黒い川が、白む。

人の数はますます増えた。彼らはゆったりと歩きながら、おしゃべりしたり、だんまりだったりしながら、一様にひとつの方向を目指した。黒い川もその方向を目指した。

白む空。

目に痛い光。

輝き始める黒い川。

色を持ち始めた景色。

海の彼方に、白いラインが描かれた。そのラインは次第に工業排水に淀んだ海に広がる。

朝が、近づいている。

見入っていると、ヤシロくんがいきなり道を曲がった。彼は倉庫と倉庫の間にある小さな路地に入り込んだ。あたしも追いかける。そして、立ち止まり、呼吸を整えようと、目の前にあるものをしっかりと確かめる。

老人が、倒れていた。

うつ伏せの姿勢で、元が何色だったかわからないコートを着て。

「お陀仏か？」

高柳が言ったが、あたしもヤシロくんも答えなかった。おばサンタは煙草に火をつける。

あたしは腰をかかめて、数時間前と同じようにじいさんの背中を叩いてみた。

「おじいさん」

二度、声をかける。やはり身体は冷えていた。冬場の人間の身体はこれぐらい冷えるものかもしれない。

「おじいさん」

ヤシロくんが肩を叩いた。すると、じいさんはやはり、飛び起きた。あたしの目の前に赤黒いニヤニヤ顔が現れた。ところどころ歯の抜けた口を大きく開いて、てかてか口元まで垂れた鼻水を右の人差し指でこすり、眉毛は真っ白のぼさぼさで、髪の毛は白ばかりのところにところどころ黒があつてそのくせ貧弱な畑のようで、その顔をあたしに近づけて出てきた言葉は

「お疲れしゃん」

であつた。

すぐにも財布のことを切り出そうと思つた。しかし犬がいない。あたしはちよつと自信をなくして「あおう、財布」と口の中をもごもごさせた。しかしヤシロくんはお構いなしにじいさんを犯人と断定して言い切る。

「僕の方とお姉さんの財布返してください」

彼の自信はどこからやってくるのだろう。じいさんは口を半開きにして、ぼんやり

した顔をしてあたしたちを見回すと、てくてく歩く。海に続く道の手前まで来ると、振り向いた。

「笑えばいいんだよお、笑えば」

それは、あたしが最初にじいさんに会ったときと同じ言葉だった。

ヤシロくんはむっとした様子で「僕たちには笑えない話なんです。このお姉さんは恋人に振られて不幸な気分につけこまれて霊に取り付かれてるし、早く除霊をしなくちゃいけない。それにお姉さんはずいぶん生活にも困ってるみたいで不幸なんですから。」と、まくしたてる。その通りなのだが、あたしはずいぶん彼に不幸だと思われていたようだ。けれど、何はともあれ、あたしは疲れていた。一晩中走り続けた。解せない出来事がたくさん起こった。見たくない光景を見た。幻も見た。多分あの世に連れて行かれそうになった。おまけに、財布を奪った犯人の口から出たのが「笑え」という言葉だ。もう疲れた。

「笑えば返してくれるんですか」

じいさんは上目遣いでこちらを見るだけで答ええない。

「じゃあ、笑います」

息を吸って、お腹から反動で吐き出されてくる空気を喉でひっかけて、声帯も震わ

せた。

「はっはっはっはっは」

顔がひきつっていたので、目尻と口の角をくつつける気持ちで筋肉を動かす。水分も採らずに走り続けたので口の中はすっかりカラカラだった。声なのか咳なのか判断しがたい声が出る。

「かっはっはっはっはっはっはっはっは」

ヤシロくんは口をあんぐり開けている。高柳は腕組したまま口元をひきつらせ、片目を歪ませている。おばサンタは吸いかけの煙草を地面に落としてブーツで踏みしめた。

「かっはっはっはっはっはっはっはっはっは」

じいさんの背後がどんどん明るくなっていく。斜め上空はどんどん白くなっていく。朝だ。朝がどんどんやってきているのだ。

「はっはっは、はあ、はあ、はっはっは、はあ、あーっはっはっは」

ちつとも面白くない。ちつとも楽しくない。笑い続けるのは想像よりもずっと辛い。お腹は痛いし、さっきまで走っていたせいで呼吸は変だし、胸も痛かった。でも、じいさんはずっとこつちを見ているだけなので、あたしは笑い続けた。

「はあ、はあ、はっはっはっは、はははは、あっははは」
一緒におばサンタも笑い出した。

「ふっふふふ、あっはははは、はっはっはっはっは」
高柳もヤシロくんも当惑している。

「ボクも笑うといいわよ、ああ、腹筋を使うって気持ちがいい」

おばサンタはヤシロくんに勧めると再び笑う。大きな身体を大きく揺らして笑う。
ヤシロくんは「何もおかしくないのに、どうして笑うんですか」と、呟いたが、誰も相手にしなかった。仕方なし、といったかんで彼もへらへら笑う。

あたしたちがあまりに大きな声で笑うので、数人の人が角からこちらを覗き見した。
あたしはお構いなしに笑った。見ていた人たちは噴出して、あたしたちを指差して口を押さえて離れていった。

どれくらい笑ったか知らない。

ずっと、ぼんやりと口を開けて上目遣いで見回すだけだったじいさんが、目尻をとことん下げて、人間の口ってこんなに大きく開くものなのか、と驚くほど大きく口を開けた。

わっはっはっはっはー

その声は大きく響いた。

太陽が昇りきったのか、突如真っ白になるほど眩しくなった。目が開けられない。

わあ、はあ、はあ、はあ、はあー

大きな風が起きた。工場も倉庫も、高柳もヤシロくんもおばサンタも、さっきまでじいさんの後ろに見えていた通りすぎる人々も、見えなくなった。

じいさんの姿が光に照らされて影になる。

そのずっと後ろの光の方角から、犬が走りこんできた。その犬は、色こそ純白だが姿かたちは、あたしから財布を奪ったあの犬だった。

あたしは何か言おうとしたが言葉が出ない。

わあ、はあ、はあー

特大の笑い声でじいさんは浮かび上がった。そしてずっと高い位置に移動していった。まるでエスカレーターを使うかのように滑らかに、けれどエスカレーターよりもずっと速く。

やがてその姿が見えなくなると――

エピソード

コンビニを出ると、あたしはビニール袋から割り箸を取り出す。便利な世の中になったもので、コンビニにポットのお湯がある。ヤシロくんから「とんぺえ」をひとつ受け取ると、海岸に向かった。

完全に朝になっていた。さきほどコンビニで時計を見たら8時だった。明け方ほどではないが海にはたくさんの人がいた。あたしたちは人ごみを避けるようにして、堤防の上に腰掛ける。若い男の子たちが砂浜で追いかけてっこをしていた。それを見て暗れ着の女の子が笑っている。

時計を持っていないので正確にはわからないが、恐らくコンビニから堤防までは3分以上歩いただろう。あたしは半分はがれていた「とんぺえ」の紙蓋を全部はがし、ビニール袋に入れた。ヤシロくんも同じことをする。

パキン、と音を立てて割り箸を割った。ちよつと先っぽがアンバランスになった。最初のひとくちを、すすった。ズズズ、と、音がする。酔っ払ったおじいさんが大きな声で歌いながら通り過ぎた。

「福笑いはいつつするの？」

ひとくち飲み込んで、顔も見ずに尋ねた。ヤシロくんはしばらく、ズズズ、ズズズ、と音をさせていたが、ようやく飲み込んだらしい。

「気が向いたら、する、かもしれない」

答えると、また音をさせてすすり始めた。

その後、気がつけばあたしとヤシロくんしかいなくなっていた。高柳も、おばサンタも、じいさんも犬もいなかった。あたしの足元には一晩中探し続けた財布が。そしてヤシロくんの足元には、文房具店の袋が落ちていた。財布の中身は全て無事だった。犬のよだれすらついていなかった。ヤシロくんの能力が彼に戻ったのかは定かではない。彼の足元に託された紙袋は、デフォルメされたサンタクロースとトナカイ、ツリーの絵が描いてあった。クリスマス時期に使われる袋だ。それを開けると、出てきたのは「新春福笑い」であった。ちよつと変わっていたのは、その福笑いの顔は、おかめでもひよつとこでもなく、福の神だったことだ。

「おばサンタがヤシロくんに渡そうとしてたのつて、これ？」

あたしは聞いたけれど、ヤシロくんは悔しそうに地面に福笑いをたたきつけただけだった。彼が今後どうなるのかは知らないが、当面、あたしには関係のないことだ。

高柳のことを尋ねると、ヤシロくんはまた悔しそうに「冥府に帰ったと思いたい」で

すが、言い切れません」とだけ言った。どうでもいい気もした。

あたしたちはぼんやりとしばらく——多分30分は何をするでもなくぼんやりと過ごし、お腹が空いたので、コンビニを探した。コンビニはすぐに見つかった。サンドイッチにしようかと思ったけれど、在庫が少なかった。それから、朝からクドいだろうか、と思いながらも「とんぺえ」を手に取った。ヤシロくんも「とんぺえ」を選んだ。

そして今に至る。

じいさんが、何者だったのか——

おばサンタは、何者だったのか——

高柳は——そして今隣でインスタントそばをすすっている少年は——

考え出せばキリのないことだった。でも今日は疲れているので考えないことにする。

脈絡もなく、タツヤの横顔が脳裏をよぎった。胸が痛む。

「ヤシロくん、おうちどこ？」

聞いてみると、彼の自宅はあたしの家から電車で東に数駅のところだった。あたしからしたら大した距離ではないが、少年にとっては大きな距離だろう。

途中まで一緒に電車乗ろうね、と言うと、電車賃貸してください、と、悪びれず言

った。千円もしないし、最初からそうするつもりだったので頷いた。

あたしは水平線を眺めた。幸いにもよく晴れた今朝は、ことさら冷える。そういえばあたしのコートは高柳の幻を見たとき線路に置きっぱなしだった。まだあるかなあ。新しいのをバーゲンで買おうかなあ。

1月1日だった。恐らく全地球に訪れるのだ。新しい年の、繰り返される毎日の、1日目。ちつともそんな気持ちにはなれなかった。ぼんやりしていたら麺がのびた。ちつとも、新年なんて雰囲気は生まれなかったけれど、麺が勝手にふやけてしまうように時間は動いているのだった。いかに自分で決めても、地球は自転し公転するのだから、時間が動くのだった。

1月は成人式もあった。2月には節分がある。ひな祭り、卒業式、入学式、母の日。数え切れないほどの節目があった。それらもこんなふうにして過ぎていくのだろう。毎日太陽がのぼり、月は満ち欠け、夜は訪れて明けて――。

ふやけた麺を口に運んだ。ヤシロくんは麺をあらかた食べ終えて汁をすすっている。(あたしはこれからどうなるのかな。)

だけどそんなことは全くわからないことだった。あたしも汁をズズとすすった。音がやけに耳に響いた。タツヤのことをまた考えた。年が新しくなったところで、あた

しが失恋したという事実は動かなかった。

(あたしはこれからどうなるのかな。)

また考えた。でも多分、それはわからないし、考えたところできつとどうだっていいことだ。

果たしかなのは、明日あたしの全身を襲うだろう筋肉痛のことだけだ。